



近世における史料保存管理の一考察

——京都門跡寺院妙法院「日記」を素材として——

青 木

陸

一、はじめに

二、妙法院について

三、妙法院の「日記」について

四、保存管理の実態と時代的変遷

(1) 保存管理方法としての「虫払」「晒書」

(2) 「虫払」「晒書」の対象物について

(3) 「虫払」「晒書」の時期と天候の関係

(4) 「虫払」「晒書」の場所と方法

(5) 「虫払」の担当者

(6) 収納方法、収蔵施設について

(7) 「龍華蔵」の正月「鏡開」について

五、おわりに

一、はじめに

近年、全国各地における文書館・公文書館等が設置され、史料保存利用機関の立場からの保存管理に関する実務的研究についての諸論稿がでている。⁽¹⁾ また、史料学の一環として、近世社会における文書保存・管理に関する具体的研究がみられる。⁽²⁾ 史料管理学の枠組みでいえば、前者は、史料を現在から未来に遺すための保存管理のための保存環境論、予防的保存方法論、保存修復技術論や総合的保存活動論であり、後者は、過去の文書管理の在り方、事例研究として位置付けられる。文書管理・記録管理史の研究は進められているが、前近代における史料の保存管理や保護方法についての研究は、未だ緒にいたばかりであり、その数は少ない。⁽³⁾

そこで本稿は、近世の人々が、史料をどのようにに保存管理を行ってきたのか。「日記」から史料(文書・典籍ほか)の曝涼など、史料保存管理に関する記事を抽出して、保存活動の具体的な運用に焦点をあてて、史料管理学の内、保存管理史の事例を提示して見たい。

利用する日記は京都東山の妙法院に残された「日記」類を素材とする。近世初期の史料として当時の門跡堯恕法親王日記、中期の坊官の記録である日次記が通時的に現存しているので、近世を通じた寺院における保存管理の時代的推移についても考察してみたいと思う。

前代に比べて文字情報の利用の進んだ近世社会において、記録史料の保存管理を日常的に行っていたのは、支配階層たる武家・公家は勿論、僧侶・神官・農民・町人などあらゆる階層におよんでいる。彼らは日々集積される文書情報などを整理・保存して、必要に応じて利用しているが、その方法・形態は千差万別である。今回は、近世において記録史料の保存・管理を組織的に行っていたものの内、妙法院という親王が門跡を勤め、門主自身が公家社会の一員

である門跡寺院の事例について、どのような史料の保存管理を行っていたかについて検討してみたい。

二、妙法院について

天台宗の名刹である京都東山の妙法院は、三十三間堂を擁して現在なお古来の法灯と繁栄を伝えており、そこには豊富な古文書・典籍が所蔵され、貴重な歴史的事実を見出だすことができる。⁽⁴⁾

妙法院は、東大路に面し、南は豊国廟参道を挟んで智積院の位置にあり、石垣に築地塀を巡らせた広大な寺域に庫裏・大玄閣・宸殿・大書院などの建物を有する。天台宗山門派で梶井門跡・青蓮院門跡とならぶ三門跡のうちの一つで、皇后門跡・新日吉門跡とも称し、山号南叡山である。寺伝では比叡山に伝教大師（最澄）によって草創されたと伝えられるが、後白河上皇の護持僧であつた昌雲が加持祈祷の験により新日吉御所の地を与えられ、法住寺殿側に移り、鎌倉期、綾小路小坂に移り綾小路殿と称されたという説がある。昌雲に続いて実全が妙法院を号し、次の尊性法親王（後高倉天皇の第一皇子）が、安貞元（一二二七）年天台座主に就いたことで、妙法院は三門跡の一つの地位を得る。

近世に入り豊臣秀吉は、東山に大仏殿（方広寺）を建立、妙法院を大仏經堂として近隣に移転させた。豊臣氏滅亡に伴なつて、徳川家康は元和元（一六一五）年に妙法院を大仏住持として知行千石を加増し、これより妙法院は新日吉神社、蓮華王院と方広寺をも管理することになる。

妙法院の門主は、常胤が天和七年六月一日まで、堯然が寛文元年閏八月二三日まで、堯恕が元禄八年四月一六日まで、堯延が享保二〇年一月二八日まで、堯恭が明和元年閏一二月五日まで、真仁が文化二年八月八日まで、教仁、

教宮、天祐、道盈の四門主について不詳、寂順が明治三八年一〇月二十九日までである。⁽⁵⁾

元録五年の妙法院開基および寺領、院家、末寺明細を示す史料を次にあげておく。

○元録五年八月四日の条

書付ノ案

天台宗ノ三字始不書之、然処ニ可書宗旨重テ從武家申之間書之、天台宗妙法院ト書タル事古今初例ナルヘシ、凌遲不及是非事也、

天台宗妙法院門跡相承

慈覺大師 惠亮和尚

同開基

相命法印 此時始而号妙法院

新日吉御所 當時之御寺地

後白河法皇 御法名行真、妙法院快修大僧正御弟子、其後法住寺皇居等被附妙法院昌泰大僧正、因慈以法皇為初祖、故号皇居門跡是也、

年代之事

從惠亮至相命 二百卅余年

從相命至快修 九拾余年

從行真法皇至当代堯恕親王五百余年

御寺領之事

千六百石余 御書判

新日吉杜 承応年中再興

後白河法皇御勸請

蓮華王院 俗目三十三間堂

後白河法皇御建立

寺領之事

拾石九斗 御朱印

後白河法皇御影堂

草創不分明

慶安年中從御公儀作替

大仏殿

秀頼公建立

院 家

日嚴院

開基 山門西塔
相頭快修大僧正附法

至当代堯什大僧都五百余年寺地蓮池北方

再興慶安年中

常住金剛院

開基 山門西塔
俊円権僧正

至当代円恕大僧都五百余年寺地石塔町北側

近世における史料保存管理の一考察（青木）

再興寛永年中

御末寺

天台宗

一、御朱印寺領院内高六拾五石

播州賀東郡御嶽山
清水寺

推古天皇御宇法道仙人開基

上方

五坊

下僧

五拾二坊

末々寺

一、天台宗

播州賀東郡東条谷西戸村妙閑山
清水寺末寺 吉祥寺

開基建立不分明

右之外御末寺有之候得共、只今從上野御下知之処一切除之候、

御境内御末寺

一、浄土宗

大仏正面町
専定寺

開基浄斉法師

寛永六年草創

一、

大仏七軒町
専称寺

開基円空法師

元和元年草創

一、

大仏十丁目文号閻魔堂
浄心寺

開基浄心法師建立

三百年計二成候

一、

大仏姪子町
称名寺

開基光譽上人

寛永二年草創

称名寺末寺

一、

建仁寺領磯屋町
西福寺

開基榮林建立六拾年余二成候

御境内神社

一、

大仏上馬町
三嶋大明神

六七拾年以來有來候其以前難考候

以上

今度京都御改国郡之内、山城・丹波・播磨三ヶ国御蔵所堂上方小給人知行所二有之、御末寺神社之分右帳面之通
相違無御座候、以上、

元禄五壬申歳八月四日

妙法院御門跡御内

菅谷宮内卿

今小路兵部卿

菅谷式部卿

御奉行所

如此書テ一冊ニトチテ遺之也、

正徳五（一七一五）年頃の妙法院門跡の機構は、二院（日嚴院、金剛院）、四坊官家（菅谷式部卿法印、今小路兵部卿法印、菅谷大輔、菅谷刑部法橋）一諸太夫（八木飛驒守）⁽⁵⁾からなる。

三、妙法院「日記」について

本稿で素材とした近世初期「堯恕法親王日記」は、門跡堯恕法親王の生涯を通じて京都の公家社会や天台教団の事情ならびにこれらと幕府との関係、法親王の対幕府感情、さらに文化面についても記載された江戸時代研究上の史料として豊富な内容を収めている。⁽⁶⁾ 原本全体の状態は非常に良く、冊子によって多少の虫損がある程度だという。

「妙法院龍華蔵什宝目録十」（妙法院所蔵）の「堯恕法親王日記」に関する記述と各日記の墨付枚数、堯恕法親王の年齢を次にあげておく。⁽⁷⁾

丙第十八号 堯恕親王御日記 外二目録一冊 三十二冊

（箱書）「逸堂座主日記」「総計三拾貳冊、一名寛元禄」

寛文三年十月二十三日ニ始マリ（事実は九月二十三日に始まる）、元禄八年正月二十五日ニ終ル、即チ御年二十四歳ヨリ五十六歳、御入寂ノ二ヶ月前ニ至ル三十二年間ノ御日記ニシテ其間中絶セラレタルハ一ヶ月ノミナリ、表題ハ何レモ「座主日記逸堂」トアリ、

〔日記年代〕		〔墨付枚数〕		〔年齢〕	
寛文四年	六七枚	延宝八年	一〇八枚	四一歳	
同 五年	八五枚	天和元年	五五枚	四二歳	
同 六年	四二枚	同 二年	六〇枚	四三歳	
同 七年	四八枚	同 三年	三九枚	四四歳	
同 八年	六二枚	貞享元年	七一枚	四五歳	
同 九年	七二枚	同 二年	七二枚	四六歳	
同 十年	四五枚	同 三年	七四枚	四七歳	
同 十一年	二六枚	同 四年	六八枚	四八歳	
同 十二年	一一枚	元禄元年	四五枚	四九歳	
延宝元年	一九枚	同 二年	七六枚	五〇歳	
同 二年	四〇枚	同 三年	四四枚	五一歳	
同 三年	三八枚	同 四年	五〇枚	五二歳	
同 四年	七四枚	同 五年	六四枚	五三歳	
同 五年	四二枚	同 六年	六六枚	五四歳	
同 六年	六一枚	同七・八年	一九枚	五五歳	
同 七年	六二枚			五六歳	

「妙法院日次記」は、妙法院の坊官によつて書き継がれた日記で、長期間にわたる記述であるために多数の筆者が参加しているが、ある程度、時期を区切つて坊官により整頓し写し直され、直接の記録者の自筆部分は少ないといわれている。しかし、原記録・原本からの忠実な書写であるため史料価値に遜色はないと評価されている。⁽⁸⁾

寛文二二（一六七二）年から享保三（一七一八）年までの日記は、藪沢弾正宗音が一括して整理し、年毎に目次をつけたと享保三年日次記奥書にある。その奥書によると、享保三年の分が全く「紛失」したので、「諸簿」を集め「文章・文字等固髓先輩之所記」して一年分をまとめたところ。その奥書の記載内容について掲げておく。⁽⁹⁾

右從寛文^{壬子}十二年至享保^{戊戌}三年、凡四十七年之記録、雖先輩之所記詳盡、而急卒考事時紛擾亂雜而患速雖知焉、

故子雖不敏年々拾要用揚條目載歲^ニ、記録之首又別為総目錄一卷、新細書而以或二三歳或四五歳為合卷、或事繁者以一年為一卷矣、惜乎享保三年之記録全以紛失、因間集諸簿而記之為一卷矣、文章・文字等固隨先輩之所記、

而細書之非敢以此為標準唯願俟、後人善書者^{而已}、

于時享保^{癸卯}八年季秋之吉藪澤彈正^{宗音}謹記

記録者・書写者である坊官には、妙法院の世襲坊官たる菅谷・松井・今小路の三氏が確認される。記録期間と現存状況は、寛文一二年より明治元年までの一九六年間（但し、延宝元より五、宝永五、享保一三、一六年が欠）にわたり、一年から三年を一冊にまとめられ、享保の始めは一〇〇丁前後であるが、享保末年より急増し、天保九年には一二九〇丁に及ぶ。全体は一八八冊あるが三冊の欠本が確認されている。保存状態は、全体として大変良く、一部に虫損がある程度である。原本すべては、妙法院において保存管理されている。⁽¹⁰⁾但し、元禄七年以前は「堯恕法親王日記」と同年代であるため、刊行されていない。本稿は、史料集として刊行されている元禄七年以降の「日次記」によらざるを得ないことをここに断つておく。

この「目次記」の内容は、朝廷・公家や他の寺院との関係記事ばかりでなく、京都所司代・町奉行の寺社政策、妙法院周辺の町屋の社会経済的内容や文化史的内容、自然災害の記事も含むあらゆる分野にわたっている。天気記載の失念もあるが、ほぼ継続して付されている。

本稿で用いた史料は、文末の表6「出典一覧」として示した。各目記の条はその出典の収録年に一致する。断らない限り各出典によっている。

四、保存管理の実態と時代的変遷

現在、史料の保存管理について考える場合、保存課題全体を見据えて、次のような範囲、段階でとらえている。その範囲は、「保存環境・条件の整備」、史料を「維持保存」していくための保存容器への収納などの「防護」、急速に劣化が進行している史料のマイクロ化、複製による「代替化」、そしてすでに劣化損傷した史料の「修復」、保存を考えた「利用」のあり方までが含まれる。

過去において、それぞれの時代の人々によってとられてきた史料保存は、主として曝書・虫干・虫払・風通しなどの防虫・防湿対策と、装潢・表具などの修復があげられよう。しかし、この他にも、過去の保存の在り方を現代の保存管理の範囲に当てはめてとらえ直してみると、土蔵などの収蔵施設を建設し、曝書を行うことは、「保存環境・条件の整備」であり、帙や箱、箆筒、書櫃への収納は、劣化の予防的処置としての「防護」、劣化予防を念頭においているかは別としても原本からの書写をおこなって「代替化」し、劣化損傷した史料を成巻、表装して装潢「修復」している。また、曝書の期間を利用して「閲覧・利用」を行っていたなどは、「利用」による保存問題を考慮している。

事例ともいえる。

ここでは、妙法院における保存管理の具体的実態について「日記」の記載から見ていくことにする。

(1) 保存管理方法としての「虫払」「晒書」

妙法院の「日記」に見られる保存管理に関する記述は、「虫払」「晒書・曬書」「涼書」などの行事に関するものである。

一般には、この行事を曝書・曝涼といい、虫干・風入・風干とも呼んでいる。⁽¹¹⁾ 曝書については、諸橋轍次「大漢和辞典」に「蔵書を日光にさらし、風にあてて虫くひを防ぐこと。書物の虫干。土用干。曬書」とある。「日本国語大辞典」では「蔵書を陰干しにして風を通し、虫に食われたり黴びたりするのを防ぐこと。書物の虫干し」としている。表4・5に示すように、妙法院においての「日記」記載の用語は、堯恕親王日記が「虫払」のみを用いており、元禄七年以降の「日記」より「虫払」に加えて、「晒書・曬書」「涼書」が使われている。但し、「晒書・曬書」は、「書籍」に対してのみ使用し、「記録」や他の装束などには一切用いてはいない。「涼書」は、享保一七年六月二六日「御学文所御書籍・御記録」と同年六月二七日「御秘書」に用いられるのが始めてである。享保一七年以前においては、「書籍」は「虫払」か「晒書・曬書」と記し、「記録」は「虫払」を使用している。

このことから、「晒書・曬書」という用語が少なくとも妙法院では書籍に限定して用いることが慣習化されていることを示しており、「日記」を書き継いだ坊官が明確に使い分けを行っていることが明確である。⁽¹²⁾

寛文五（一六六五）年六月一三日の条の「従今聖教虫払」との記事があり、この頃には行事として実施されていたと考えられる。

(2) 「虫払」「晒書」の対象物について

「虫弘」「晒書」の対象物は、表1をもとに「堯恕法親王日記」時期（寛文五―元録六年）と、「妙法院日次記」時期（元録七―享保一九年）に分けて見ていきたい。記主の違いがあるので、記載事項や用語の使用がことなるため、安易な比較できないことによる。

「堯恕法親王日記」時期は、寛文五（一六六五）年、六月一三日の条の「聖教」以降、「虫弘」の記事が見られないが、延宝二（一六七四）年、「藏經」「書籍」とあり、延宝四（一六七六）年に「記録」が加わる。但し、延宝三年において必ずしも記録も含まれて行われなかったとは断定できないが、延宝二年には「藏經」「書籍」と語を止め、三年は「藏經并内外読書」とのみ記載され、延宝四（一六七六）年以降になって「書籍記録等」とその他にも事物があるような現し方をとっている。今後、保存管理史の発展のためには、史料を保存してきた家あるいは組織における用語使用を明らかにする必要がある、その中から近世における用語使用の一般化が可能となろう。

ここにある「藏經」とは、寛文一〇（一六七〇）年一〇月、中国よりの宋版一切經の收藏をさしている。この一切經の請来は、天台教義の研究や經典・史伝収集などに力を注いだ堯恕法親王の宿願であった。

寛文一〇年六月八日の条には

八日、従先月九日已後、箱并落紙落卷等補之、今日依為吉日良辰以藏經納于文庫早、都五十四箱、二百九十七套、二千七十九冊、九千四百十四卷也、日本国処ミ藏經雖有之、宋本希有也、大和田隱元禪師之藏經漸二百十三套也、長谷寺之藏經良多也、しかれとも不滿九千卷々々、其外処ミ經雖有之以外少也、建仁寺・勝尾寺等也、此外東叡山板、北野靜明寺板等ハ多少善惡並不足言、仍テ今度到来之書誠以當門ノ眉目歟、

とあって、箱などを調整して、この吉日の日を選んで「藏經」を文庫に納めたとあり、法親王の並々ならぬ意欲が伝わる。全体量は五四箱（二九七套、二〇七九冊、九四一四卷）と龐大であり、所々寺院の宋版と比して「今度到来

之書誠以当門ノ眉目」と賛している。延宝三年七月一日、この「藏経」「内外典」を閲覽する間に「虫払」を終えて「文庫」に収納し、その際、品宮と新中納言殿（新広義門院、法親王の母）より寄付された一切経用帙で垂絹を改め、その題を書生宗哲（姓、緒方）に書かせている。⁽¹³⁾ 堯恕法親王の藏経に対する思いの一端は、延宝四年六月一日の虫払の開始から晴天であり、目出度い目出度いと賀していることから窺える。また、門主へ挨拶に来駕した養源院（蓮華王院の東にある天台寺院）や城南院僧正は、「虫払」を理由に対面を許されない場合がみられる（延宝六年六月一日、元禄三年六月二一日の条）。

次に「記録」について、どのようなものであったかを日記の記載から確認しておこう。妙法院そのものの記録の例ではないが、寛文一〇年七月二七日の条の内、

今日行金剛院也、彼寺之旧記混乱依多之、今日悉見分改之分部帙定類早、尤院宝不朽之重宝也、珍重々々、
廿七日、又如昨日改記録早、今日悉成就、

とある。堯恕法親王自ら行った妙法院院家の一つ金剛院の「改記録」の事例は、ここにある「旧記」を含むものを「記録」ととらえていたことが解る。整理の様子も伝えており、部類を改め、その部ごとの帙を定めることを行っている。それらの「記録」は「院宝不朽之重宝也、珍重」であると重要性を指摘している。

「藏経」「書籍」「記録」の虫払での扱いが別々であったことは、延宝四年六月一日の条に藏経の虫払を始め、書籍・記録と順々に払うとあることと、延宝七年六月一七日の条に「先藏経、次書籍記録仏像等次第二払之、如例年」とあることでわかる。「如例年」としているところから、扱いが定式化していることを示している。この年「仏像」が虫払の対象にあげられている。「記録」は、藏経や書籍との併記される例が多いが、貞享元年、元禄四年に藏経などとは別日の虫払期間の末に扱われている。

「妙法院日次記」時期（元録七・享保一九年）は、対象物が増える。堯恕法親王の記述における取り扱われ方は、個別であったことを示したが、「妙法院日次記」は、より対象が分けられて別日の取扱いであることが表5の記載で確認される。

また、元録七年は、掛物、装束、道具が虫弘の対象に加わっている。但し、記主がそれ以前と異なるため、対象の増加と一概にとらえるべきではなく、門主の日記と坊官の日記の記述目的の違いによるものと考えなければならぬ。坊官の記述は、役儀上の業務日誌を主とするならば詳細な記入が求められていたと推測される。他にも門主の日記との違いは、用語にも現れ、すべての虫弘対象に「御記録」のように「御」が冠せられる。

「日次記」の元録七年段階では、単に虫弘対象の広がりといえないが、表5によると元録一五年、享保七年辺りを境に各種の対象物名が新たに加えられている。この時期の対象物の分化は、取り扱われ方の変化として見る事ができる。次に各対象についてみておくことにする。

まず、「御掛物」は、門跡寺院としての性格から、書画など画像・仏絵を軸物に装潢した掛け軸・掛幅である。堯恕法親王は教学とともに詩歌や書・絵画にも優れ、多くの作品を残しているため、それらを含むものと考えられる。「御屏風」も文化的教養と寺院としての格式により有していたものであろう。

衣類として「御装束」「供奉装束」「太閤秀吉公装束」「異国人装束」「朝鮮国王装束」があげられている。「御装束」「供奉装束」（行幸などの行列での装束）は誰の物とは特定できないが、「太閤秀吉公装束」は、妙法院が方広寺を所管していることから秀吉遺品を管理していると考えられる。「供奉装束」は、坊官の菅谷大輔が、禅智房（円純）と松井志摩と相役で勤めることを命じ（享保七年七月五日）、管理されたことがわかる。

道具類は、「御道具」「御納戸御道具」「御手道具」「御茶入」「茶道方預り道具」がある。「御手道具」は門主関連の

道具であり、他は木製品・漆芸品・金工品と思われるが、詳細はつかめない。御茶道具類は、御茶の饗応の記事が日次記に散在するので、その関係であろう。「手鑑」は「手鏡」とも記載があり判別できない。「夜具」は享保七年のみである。

仏事に関係した「仏絵」「幡」「法衣」「仏具」があり、この内の「仏絵」は、堯恕法親王が描いた大幅の「不動明王図」などが含まれていたことは想像に難くない。

「御書籍」は、毎年の「虫弘」「晒書」の対象にあげられているが、享保七年には記載がない。これは「御書籍」を「和書」「仏書」「儒書」「歌書」に分割し、この時より「蔵経」を別立てにしたことによる。

「記録」も「御書籍」とともに欠かさずに行われている。「日次記」にみえる「記録」には宝永四年一〇月二七日の条に次のような記載がある。「注・末尾、追加史料参照の事」

ここには、伝奏の呼び付けによって覚書をうけ、八瀬よりの繪旨写留帳を渡され、「御記録ノ内座主と有之一包ノ内へ入置也」とある。武家伝奏よりの文書管理の在り方を示す記載としても注目される。

「御朱印」「水帳」は、宝永元年が初出で、「御朱印并水帳等」と記載され、「於小書院坊官曝之」とあり、坊官の担当であることが明記されている。後でも述べるが、「虫弘」における書籍の担当は妙法院家来が勤めており、慎重な扱いがとられていることを示している。伝奏から寺領ならび末寺の朱印状に関する問い合わせが「日次記」に再三記載されている。⁽¹⁴⁾（朱印地は、天和元年には一六三三石を安堵されており〔寛文朱印留〕、幕府との関係に一因があるともとれる。）

朱印状の管理について、貞享元年七月一〇日の条の例をあげておく。（・・・点筆者付す）

一、今小路兵部卿江戸発足、今度朱印被改之使也、清水寺光輪坊同道、一門ノ坊官刑部卿も同道々々、

一、就朱印、訴訟有之方ハ使者発足ノ時分從丹後守可有指図旨内ニ徒伝奏被申渡よし也、仍テ青門ノ使者等ハいまた不発足、予カ使者一門ノ使者等ハ何も訴訟之事無之故ニ今日発足也、

一、代ミの本朱印入箱兵部卿持参也、此外ニ新數桐ノ箱ヲ調、嚴有院ノ時ノ朱ヲ別紙ニうつし之ニ入テ持参也、写ハ一字不違、尤行并字ノクバリヤツシ等少も無相違様ニ写之、月日モ書テ朱印ノハ其下ニ御朱印ト書也、書判ノハ御名乗御書判ト書也、此度も或ハ御判トハカリ書キ或ハ朱ノ丸などを絵ニ書テ以外丹州ニしかられたる者も有之よし也、紙も大たかに書也、つゝみかみの上ニ嚴有院様トハカリ書也、総テ俗なる事也、

堯恕法親王は、妙法院に關する朱印については問題ないので坊官が江戸へ出立したが、青蓮門院は出發できないでいると記し、当方には問題のないことを自負している。そして、朱印状の本書は朱印箱に入れ坊官が持参し、写にいても新調した桐箱にいられて持参していることがわかる。この「写」の実態は、案文作成の実態を示している。「写ハ一字不違、尤行并字ノクバリヤツシ等少も無相違様ニ写之」とは、本紙とともに写が案文としての効力を十分に持つための様式を示唆している。ことに本紙ばかりでなく、写の様式・機能を知ることができ、かつ文書管理の一端をうかがえる事柄として興味深い。

以上の「虫弘」の対象を検討した結果から三点指摘しておきたい。

①「虫弘」の行事としての勵行は、宋版一切経の龐大な藏経の保存管理の必要性が契機となつてゐること。

②書籍とは別に記録の保存管理を重要視していたこと

③元録一五年、享保七年辺りを境に虫弘の対象物の見直しと類別がなされていたこと。

そして、この保存管理を徹底することは、堯恕法親王の個人的資質というばかりではなく、妙法院門跡としての伝統と權威を支える上で保存し守るべきものとして考えられていたとらえておきたい。

(3)「虫払」「晒書」の時期と天候の關係

表の4・5をもとに「虫払」の対象別、期間一覧を表2にまとめて示した。旧暦では、各年を比較できないため、新暦に直して表示した。

ほぼ、新暦の七月下旬に行われていることがわかる。

元禄二年六月二日の条には、

廿一日、從今日虫払始之、從四月六日連日雨也、日ミ雨湿以外也、無三日晴、從今月二巳、入土用といへとも、猶不晴、湿寒又甚也、少ミ有着綿絮之人前代未聞ノ事也、去ル十七日夕立雷鳴、其後至今日快晴也、仍テ今日始之也、

四月より連日雨のため、六月に入つて土用の入りをむかえたが、晴れることがなく、湿潤で寒いこと甚だしく、綿入れを着るほどであった。やっと一七日になりその後晴れたので「虫払」を始められたとある。

また、宝永六年六月一八日の条では、「一、明後一八日より御書籍むし払被始候に付」とあつて、その一八日は土用の入りにあたる。

享保一四年、一五年は、土用の入り前に虫払を行っているが、「掛物」「道具」「装束」などであり、書籍、記録は土用の入りの後になっている。

享保一八年六月一二日の条は、道具類の虫払いから始めるにあたって、「例年御書籍より始り候へとも、今年ハ雨湿深ク候故、道具より始ル也」と記している。

このことから、土用の入りを「虫払」の時期に設定していることがわかる。また、虫払いの順番が決められており、

「書籍」「記録」はまず最初にとりおこない、次に他の対象に移ることになっていることを示している。天候によっては例外として「虫払」対象の順番を変更することを意味している。さらに、湿潤な場合でも道具などは行ってしまうが、書籍の場合は、天気を相当配慮していることがわかる。表2をみると、ほぼ書籍と記録は七月下旬に集中している。これは土用の入りに「書籍」「記録」を行うことが決められていたと判断できるところである。さらに、「記録」の後に「書籍」を行うことは希であることが読み取れる。

京都盆地の気候は、夏の暑さのきびしさは良く知られており、七・八月の平均温度は三〇度を越える。表3に京都市の気候を平年温度・湿度・降水量で示しておいた。東京に比較して四季の温度変化が小さく、年間を通じては温かな気候に属する。しかし、降水量を比較すると、一〇―十二月以外は東京よりも多く、七月は倍近くになっている。土用の入りに「虫払」行事を設定すると新暦七月下旬にあたっているわけだが、これだけの降水量におよぶ七月は、雨が降りやすく「虫払」の支障となり、時期の変更がおのずと必要になる。元禄二年六月二一日の条の日程の変更はこのような京都の気候に起因しているといえる。

次に、虫払期間の天候との関係を書籍の場合について見ておきたい。

延宝八年の虫払は、七月一七日に始まって二八日に終わっている（表4参照）。一二日間という長期にわたっている。これはその間に大雨の日が二日挟まってしまっていることが原因とおもわれる。天気により必然的に長期化したものだろう。元禄六年六月二六日は、曇であることに加えて「従昨夜風吹」のため、「虫払闕也」と作業を止めている。雨ばかりでなく、風も停止の理由であることがわかる。

虫払の前日の天気は、残された日記の全年を調べると、すべて晴の日にあたっている。また、虫払の間に前日の午後や夜半に雨が降ると、次の日は停止していることが多くみられる。

虫弘の時間帯は、元録二年六月二四日に、「申下刻（一六時）雷鳴大雨、然とも虫弘之以後晚かた也」とあって、一六時以前に済ませている様子である。⁽¹⁵⁾

(4)「虫弘」⁽¹⁶⁾「晒書」の場所と方法

「虫弘」の場所が特定できるのは、宝永元年と、享保九―一九年の期間である。

宝永元年 「御朱印并水帳等」小書院

享保九年 「御手道具」御座ノ間 「御納戸御道具」御座ノ間 「仏絵・仏具」南殿

享保一〇年 「御朱印・秘書」御座ノ間 「大幡」南殿 「御手道具」御座ノ間

享保一一年 「御道具」南殿 「御掛物」南殿 「御納戸」御座ノ間 「藏経」南殿

「御朱印」御書院 「屏風」南殿

享保一二年 「屏風」客殿 「御手道具」御座ノ間 「仏絵・仏具」南殿

享保一四年 「御手道具」御座ノ間 「御朱印并水帳等」御書院 「秘書」御座ノ間

享保一五年 「秘書」御座ノ間 「御手道具」御座ノ間

享保一七年 「仏絵・仏具」南殿 「秘書」御書院

「御装束」「太閤秀吉公装束」「朝鮮国王装束」南殿

「屏風」南殿 「御道具」南殿 「御手道具」御座ノ間 「大幡」南殿

「茶道方」客殿

享保一八年 「御道具」客殿 「御装束」「太閤秀吉公装束」「朝鮮国王装束」客殿

「仏絵・仏具」南殿 「御記録」御座ノ間 「秘書」小書院

「御朱印」御書院 「屏風」客殿 「供奉装束」客殿 「茶道方」客殿

享保一九年「御手道具」御座ノ間 「御朱印」御書院 「御記録」御座ノ間

「茶道方」南殿 「秘書」御座ノ間

享保一九年六月二八日の条に、「於御座間御記録虫払、前々於客殿有之候得共、子細依有之也」と、先例をうかがっている。しかし、この記載は前年も「御記録」御座ノ間であるのに「子細依有之」とは不明である。しかし、多くは同じ場所において「虫払」されていることから、特定の場所において行われていたといえる。「蔵経」は南殿でおこなわれ、南殿で行われる対象は量が多いものまたは大型のものに対応している。かえって、「御朱印」は御書院、「御記録」は御座ノ間であり、小規模なものがあてられている。機密保持と重要性からの設定と推測される。

「虫払」の方法については、明記されていないが、指定の場所から推しはかってみるならば、各建造物の中で広げて作業したのではないだろうか。一般には、曝書という「日にさらす」行為をもつて、防湿・防虫対策となるととらえられているが、必ずしも「日にさらし」してはいないのではないかと推測される。一般的とはいえないが、京都の寺院（日蓮宗立本寺）で勵行されている虫干の事例を参考として、室内に吊したり、敷物の上に広げてとりおこなわれている様子を紹介しておく（写真1）。

天候の変化への対応は、享保一四年六月二〇日の条の記事で見ることができる。二〇日、曇、午刻計より雨」のため、「供奉装束虫払、存知ノ外、急ニ降雨難儀騒敷申也」とあり、二日に雨ではあるが、「此中干之處、雨天故俄仕舞、若しめりもやと今日又右の装束干なおす」作業を行ったとある。天候の変化に機敏に対応していたことと、収納するに際しての状態点検と細心の注意が払われていることがわかる。また、雨天の日に再度干し直しを行っていることから、室内での「虫払」の様子が窺えるものである。



写真 1 京都日蓮宗立本寺の虫干風景

「虫払」の期間は、対象物によって異なっている。「書籍」は、一日から一〇日にわたってとりおこなわれ、天候による延期などがあつて一定はしていないが、平均して約五日間の長期の傾向を示している。「記録」は、享保七年までは一日しかあてられていないが、享保八・一五・一七・一八・一九年に二日間とられている。他の対象はほぼ一日に限られ、道具類が二日にわたることが希にみられる程度である。「虫払」期間と対象の物量とが比例すると仮定すると、「書籍」の量は多く長期に対応する必要があり、「記録」は増加傾向にあつたとみられる。

(5)「虫払」の担当者

「虫払」は、どのような担当者によってとりおこなわれていたのか、次に見ておきたい。

「書籍」に関して、元禄七年六月四日「出入輩参集如例」、元禄九年六月二七日「依召出入輩参集如例」、元禄一〇年六月一〇日「明日より御晒書始り候付、従召寄輩、辻昌賢・伊勢祐和・小田岨山・関祐庵・駒井

宗俊・祐生孫一・三宅意徳・浄山等也」、元録一四年六月一五日「御書籍虫弘、今日より被始也（以下八名略）」、宝永二年六月六日「明後八日御晒書はしまり候付、如例出入ノ輩可有伺公之被仰遣也」という記事がみられる。「書籍」の虫弘は、数名の者が「召寄」または「伺公」して行われている。呼び寄せる時期は、虫弘の日が設定されて事前に知らせる時と当日の場合がある。天候に左右されるため、天気の子報と土用の入りを勘案して呼び寄せたものと考えられる。

「書籍」の担当者名の記載されたものとしては、次の年次が確認される。

元録10年	元録13年	元録14年	元録16年	享保元年	享保2年	享保4年	享保11年	享保12年
辻昌賢	辻昌賢	辻昌賢	昌賢					
			昌相					
伊勢祐和								
小田峴山	小田峴山	小田峴山						
小田鞠負	小田鞠負	小田鞠負	鞠負					
関祐庵	関祐庵	関祐庵						
駒井宗俊								
祐生孫一	祐生采女		采女					
三宅意徳								
浄山	浄心	浄心				浄心		
山田玄周	山田玄因	玄因						

奥田九郎左衛門 奥田九郎左衛門

八木佐五右衛門

山本三立

山本三立

三立

山本三立

山本三立

山本三立

山本立安

山本立安

佐尾外記

佐尾外記

佐尾外記

生田英全

東辻大和※

松下見樸

松下父子

佐伯甚藏

浄慶

これらに登場するものは、どのような身分のものであろうか。「日次記」中の記事から具体的に検討しておきたい。
元録一〇年に見える関祐庵について、元録八年二月八日の条によると、

覚

妙法院御門跡御家頼關祐庵と申者、大佛西之門町、堀辰左衛門と申者之家ニ借宅仕罷有候處、此度同町二町宅所持仕候、為御断如此御座候、以上

亥二月八日

妙法院御門跡御内

菅谷宮内卿

菅谷式部卿

(金庫)
柳原前大納言様御内

堀内内蔵助殿

多田掃部殿

(公通)
正親町中納言様御内
西池左近殿

中村織部殿

元録九年三月一五日の堯恕法親王の一周忌速夜法事においては、

一、於御書院御非時被下輩、伊勢祐和・祐生孫市・宥傳坊・祐生元眞・井上三省・村上友的・法國寺・最上八郎
左衛門・關祐庵・小田嶋山・小田靱負・辻昌賢・田中小平太・山田玄周・駒井宗俊等也、村上平右衛門・須摩
三十郎・琦首座等ハ不參也、

とある。この元録八年の記述から、関祐庵は妙法院の「御家頼」の身分であることがわかる。また、元録九年の速夜法事において、関祐庵とともに「非時（僧の食事）被下輩」として伊勢祐和・祐生孫一・小田嶋山・小田靱負・辻昌賢・駒井宗俊の名が見える。妙法院における「御家頼」について、「藏経」の帙題を書いた緒方宗哲場合の経歴から推しはかってみたい。宗哲は、長年寺に寓居していたが、「松平土佐守へ仕官」している（延宝七年一〇月一二日条）。そして、その子佐伯甚蔵は、「松平土佐守方無障牢人」となったので、妙法院の御家頼に召し加えられるよう願いを乞い（享保七年一〇月二二日）、願いのとおり召し抱えられている（享保七年一〇月二二日）。他家への仕官も可能であったことの例である。また、妙法院の「御家頼」は、召し抱え、解雇あるいは宿変等に付いて伝奏に届けることとなっており、その内容を「御家来帳」に記すことになっている（元録八年正月八日）。以上から、妙法院における「御家頼」は、寺院との従属的關係が生じて種々の奉仕を行ったものとみられるが、寺との關係は比較的ゆるやかで自立的なものであり、寺院の雇い入れた者については伝奏の管理下におかれるものと考えられる。

「書籍」の虫払は、数名の者が「召寄」して行うとともに、「日次記」を記録した「当番」に名があるものが「虫払御用」を勤めている。享保一一年六月二二日の条に、「伊織・数馬・靱負虫払御用」とあって、当番から外れて別

に「虫払御用」と記載されている。この三名は、前後の当番に名前のある林伊織・生田数馬・山下鞠負と思われる。享保一七年六月一九日の条にも、書籍の虫払の日に、「数馬御虫払二付御用」とある。これらの当番とある者達の数は一定していないが、正徳元年六月二六日の条に坊官とある今小路・菅谷両家を筆頭にして他に数十名おり、そのうち二名から四名で交替に勤務している。この当番に名前のある藪沢弾正は、元禄一四年一〇月六日の条には「御家来」と記されている。但し、「御家来」であっても、先の関祐庵等の「非時被下輩」には含まれてはおらず、同時期に当番として名を連ねている。今小路・菅谷両家以外の者は、坊官であつたかどうかは定かではないとしても、「召寄」者達とは別に「日次記」にある当番職が「虫払御用」役を勤めていたことがわかる。今後は、妙法院の寺院機構・組織の研究を合わせて明確にする必要がある。

「書籍」の虫払以外は、「召寄」者達の記載はみられない。当番職の「虫払御用」と記されているのは、「御装束、并太閤・異国人装束等虫払」（享保一一年六月二二日）、「御納戸虫払」「供奉之装束虫払」（同年同月一五日）があり、その担当も林伊織・生田数馬・山下鞠負である。

「御朱印并水帳」は、「於小書院坊官曝之」（宝永元年七月二四日）と明記されている。

坊官は、「門跡寺院に仕える在家の法師であり」、⁽¹⁶⁾菅谷・今小路両家が世襲でこの任にあたっているようである。以上から、「虫払」担当者は、妙法院の中でも支配役にあたる坊官や家来が勤めていたことがわかる。これらによって行われた「虫払」は、妙法院にとって大変重要視され、かつ慎重な取り扱いがとられていることを示している。

（6）収納方法、収蔵施設について

「虫払」の際の記事にみられる収納方法は、天和元年六月二九日条に「むし払すむ、今日たんす記録箱等悉く蔵へ納」という事例より窺い知ることができる。この年は、「書籍記録等」の虫払を行っており、その書籍・記録は、「た

んす」(筆筭)と「記録箱等」に収納されたことが明記されている。小泉和子氏は、寛文期あたりが筆筭の発生期ではないかと推定している。⁽¹⁷⁾その説にたつた普及状況からみると、妙法院での「たんす」の使用はかなり早かったと言
うことができよう。さらに、「記録箱」と具体的に箱の内容物を特定していることも注目される。

この天和六年以前での文書の収納については、妙法院より先例を勘申した勘例についての寛文八年四月一三日の口
上覚の中に次のような記載がある。

この記載から、先例を勘申した勘例は、「寛永時之本紙者山門一之箱」とあつて「箱」に収納されていたことがわ
かる。

「書籍」と「記録」の収蔵施設について、次にみていくことにする。

○寛文九年二月二十六日の条

廿六日、従武家伝奏使到来、如此一紙ニテ到来、本紙在文庫、

覚

撰家門跡衆其外堂上方御用之儀、此跡者吉良
所迄雖被相達候、向後者伝奏衆迄被申入、其
上従両伝奏板倉内膳正迄御伝達可然候、以上、

二月九日

口上之覚

今度青木遠江守就上洛、老中より被差越候覚

近世における史料保存管理の一考察(青木)

書壹通為御心得入見參候、院家衆へも可被仰
伝候、以上、

二月廿六日

○寛文九年閏一〇月七日の条

七日、專照寺来、即対面、盃等如例、從今日即加末寺早、彼僧一紙云、
越前国

当寺自上古本寺無之候ニ付、今度願申ニ付、御末等ニ被召加候、自今以後相違御座有間敷候、為其如此候、
以上、

寛文九年己酉閏十月七日

如 善判

菅谷左 京殿

同 大 輔殿

同 刑部卿殿

右之本紙在文庫、

この記事より、前に示した内容の文書を「文庫」に納めていたことがわかる。

中国より渡った宋版の「藏經」は、寛文一〇年正月八日「文庫」に納めたが、天和二年七月二九日、「文庫」の狭
隘と内裏から預かった書籍の保存に万全を期すことができない状況を理由として、新たに「經藏」を建造することと
し、貞享元年六月一九日にその新文庫を「龍華藏」⁽¹⁸⁾と名付ける、という次の記事によって確認することができる。

○天和二年七月

廿九日、文庫年来従内裏御あづけ之御書籍にて此方之藏經等外ノ雑々ノ藏ニ置之故火災等無心元、仍テ更ニ建經藏今日礎也、然処ニ中央ノ柱之礎ノ処ヲ掘穿之時、銅ノ小像一軀掘出之、見之則弥勒大士也長一寸三分、弥勒者是当歳導師也、実使是仏經及龍華之曉之瑞応歟 尤奇妙之事也、仍テ以香湯洗之深藏之仏堂、

○貞享元年六月一日

一、今日藏經并書籍等虫弘早ヌ、新文庫へ今日藏經以下聖教書籍納之、件之弥勒像ヲ安シ号龍華藏ト名ク、廿日、記録等虫弘及晩亦納龍華藏、

この「龍華藏」には、「藏經以下聖教書籍」とともに、貞享元年六月二〇日に「記録」も収蔵されことになった。

(7)「龍華藏」の正月「鏡開」について

妙法院においては、新年の始めに「鏡開」と称する「龍華藏」の公開が行われている。初見は、延宝七年正月二二日で「今日書籍藏經鑑ひらき、醍醐少将来駕」とあつて、醍醐少将を招いての行事である。貞享三年正月一五日には、園前題大納言と中院前大納言が招かれている。この行事は、ほぼ毎年開催されており、元禄七年正月七日の参集者は次の通りである。

一、今日御鏡ひらき也、

(鳥惣) 大御所渡御、御相伴、玄(鳥惣)・前大・日嚴院大僧都・金剛院大僧都・祖岸殿・法國寺(小田)・岷山(岡)・祐庵・宗俊等也、

元禄七年の場合は、妙法院の関係者のみの集まりになってきている。このあとも参会者はあまり変わりがみられない。ここで注目されるのは、参会者の中に、「虫弘」の際に「召寄」の者達がいることである。堯恕法親王の時期は、その関わりから公家が呼ばれているが、堯恕法親王亡き後は、「召寄」の者達が呼ばれている。このことは、旧暦での正月、新暦では一月下旬から二月始めの時期に、歳を開けて「寒干」「寒風入れ」を行っていたのではないかと推

測される。そして、その正月のめでたい行事に合わせて、なかなか見ることができない「蔵経」などの収蔵物を公開していた、と考えるのはあながち間違いではなからう。禁中において、虫干の機会に書物の「公開」を行っている事例がある⁽¹⁹⁾。

五、おわりに

以上、近世の人々が、史料をどのように保存管理を行ってきたのか。門跡寺院妙法院「日記」類から、「虫払」など史料保存管理に関する記事を抽出して、保存活動の具体的な運用に焦点をあてて、「虫払」等の保存管理の在り方について検討した。

今回は、保存管理について絞ってまとめることを試みたが、今後は日記類を素材とした研究によって、保存管理面のみでなく、文書管理・記録管理史（文書の授受、伝達、取扱等）の実態を明らかにすることができよう。

本稿は、史料集として管見できる史料にとどまっているため、妙法院の保存管理の一部の事例の提示しかできていない。今後、「妙法院日次記」続刊をまつて補訂を加えると共に、妙法院史料群に含まれる関連史料の調査に努めていきたい。

注

(1) 廣瀬(青木) 睦・山田哲好「史料館における史料保存活動」(史料館研究紀要「二三号、一九九一年」、金山正子「大阪府所蔵資料の劣化状態調査の提案」『大阪府公報』調査結果を参考として)、「大阪あーかいぶず特集号」三

号、一九九二年)

(2) 保坂裕興「村方騒動と文書の作成・管理システム」武蔵国秩父郡上名栗村を事例として」(『学習院大学史料館紀要』六号、一九九一年)、大友一雄「近世社会における文

書管理と文書認識―美濃国加茂郡蜂屋村を事例に―(『史料館研究紀要』二三号、一九九二年)、富善一敏「近世村落における文書引継ぎ論と文書引継ぎ・管理規定について」

『歴史科学と教育』一二号、一九九三年)。

(3) 沓掛伊左吉「曝書史稿」(『沓掛伊左吉著作集―書物文化史考』八潮書店、一九八二年、福井保「紅葉山文庫」郷学舎、一九八〇年)。

(4) 妙法院の概略については、ほとんどの部分を村山修一「妙法院門跡堯想法親王とその時代」(『史林』五六卷四号、一九七三年)に寄っている。

(5) 『説史備要』(講談社、一九六六年)。

(6) 前掲(4)に同じ。

(7) 出典番号13。

(8) 前掲(4)、および村山修一「妙法院日次記」(『日本歴史「古記録」総覧(下巻)」新人物往来社、一九九〇年)。

(9) 出典番号7。

(10) 前掲(3)に同じ。

(11) 前掲(3)「曝書史稿」。

(12) 『大漢和辞典』によると「曝」は「晒」の国字とある。

(13) 緒方宗哲については、「虫私」の担当者の項目で述べる。

(14) 朱印状については、出典番号7に詳しい。

(15) 現在残っている妙法院の建造物については、前掲の注(3)を参照。現在、換気を行う時間帯は、一日の内でも湿度が低めとなる一〇時より一四時とされている。

(16) 『国史大辞典』第十二卷(吉川弘文館、一九九一年)。

(17) 小泉和子「筆筒」(法政大学出版局「ものと人間の文化

史 46」、一九八二年)。

(18) この龍藏庫は、いまでも現存し寺宝展示場となっている。

前掲(4)による。

(19) 熊倉功夫(『寛永文化の研究』古川弘文館、一九八八年)一一〇頁。

(追加史料) ○宝永四年一〇月二七日

一、柳原家より坊官壹人可参之よし告来、仍テ刑部卿行向之處、雜掌堀内内蔵助ヲ以、被申渡趣、覺書被相渡、其云、

覺

八瀬童子共へ被下候繪旨之留帳、松平紀伊守殿より兩傳迄被指越候間、被掛御目候、繪旨之寫一覽被致候處、宛所段々不同御座候、最初建武年中被下候繪旨ハ、如何様之譯ニ而被下候御事ニ候哉、承度被存候、其以後山門之座主御當職之時分之御記録等、御吟味被成候ハ、其譯も相知可申と被存候故、被申入候、各被仰合御吟味被成、委細一々御書付張紙被成可被下候、少々承合被申度事有之候由ニ候間、近々御書付、兩傳方迄可被遣候、以上、別紙書付云、

一、八瀬之庄住人へ被下候繪旨之儀、如何様之子細ニ而御代々被下候哉、

一、寛永元年以後御代々張紙被成可被遣候、

一、御文言之内、座主宮と有之、宛所も法中之様ニ相見候、然處八瀬ニ所持之儀、子細有之候哉之事、

十月

八瀬よりの繪旨寫帳一冊被相渡、別ニ有之、御記録ノ内座主と有之一包ノ内へ入置也、

【注】○は、対象名が明確に記載されている場合
△は、対象名がないが「虫牡」「醜書」とあり、前後を考证
すると、その対象名にあたる場合を示す。
「御朱印水枝等」と併記されているものが多いが、組み
合わせに要裏があるため、別個の項目立てとした。
組み合わせは、表4・5を参照された。

[illegible]

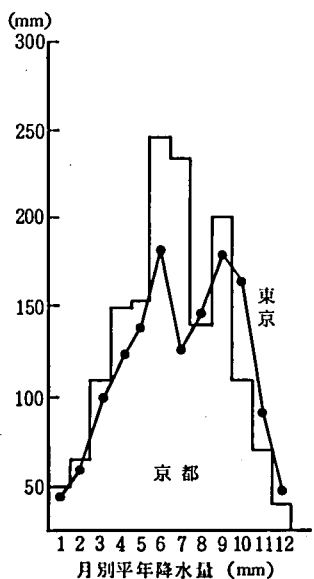
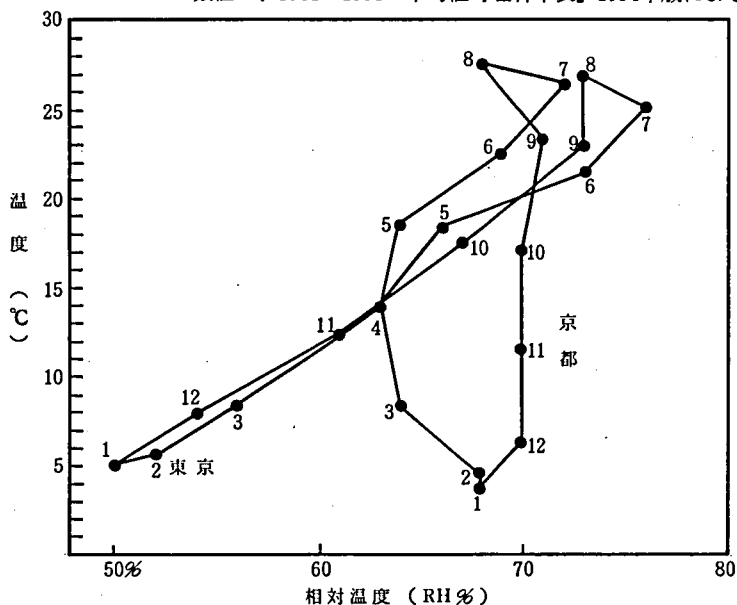
史料館研究紀要 第二六号

1110

——「西頭」「東頭」以外の土地対象を示す。毎日継続していない場合があるが、記事の最後まで線を引いた。但し、間隔が離れている場合は間をあけた。

〔表3〕 京都の気候（平年温度・湿度・降水量）

数値は、1961～1990の平均値『理科年表』1994年版による。



京都=棒グラフ 東京=折線

「表4」「虫払」「晒書」等記載一覽(一)(寛文5年・元禄6年)

・凡例・注記は表5の末に付した。

年	代	旧暦月日	新暦月日	日	記	載	内	容	備	考
寛文5年	1665	6・13	7・25					一、從今聖教虫払、及晩景夕立當おひた、し、(略)	聖教	
寛文11年	1670	5・9						〔寛文10年5月9日、藏經(一切經)入寺〕		
寛文12年	1671	6・						〔寛文11年6月頃、癸卯親王比叡山へ、記事なし〕		
寛文2年	1672	6・						〔寛文12年6月、故障あつて日記を記さず〕		
延宝3年	1673	7・6						六日、藏經虫払、	藏經	
延宝4年	1674	7・6						三日、藏經虫払、〔虫払終日不詳、天氣無〕	藏經・内外典文庫	
延宝5年	1675	7・13						十三日、藏經并内外典誦書、此中虫払早に仍テ今日納新文庫、又品官御方へ新中納言	藏經(書)	生示哲
延宝6年	1676	7・13						殿依御寄附一切経帳之垂翻改之、令諸生示哲書文字、	藏經・書籍・記録等	
延宝7年	1677	7・6						十一日、今日土用二入、藏經虫払從今日始之、書籍記録等次第虫払之、從今日毎日晴天、	虫払8日間	
延宝8年	1678	7・11						自愛々々、	藏經・書籍等	
延宝9年	1679	7・18						十八日、虫払早ヌ、〔天氣無〕	藏經・書籍等	
延宝10年	1680	7・18						〔延宝5年6月江戸輪王寺へ、4・16月日記を記さず〕	文庫	已上刻9時
延宝11年	1681	7・18						十一日、從今日藏經書籍等虫払、	藏經・内外典文庫	
延宝12年	1682	7・18						十三日、養源院來駕、虫払故不能対面、	藏經・記録等	
延宝13年	1683	7・18						十四日、書籍記録等虫払早、〔天氣無〕	藏經・書籍・記録・	
延宝14年	1684	7・18						十五日、書籍記録等今日文庫へ納早、已上刻女院御不予從昨夜重悩之由、(略)	藏經・書籍・記録・	
延宝15年	1685	7・18						十六日、雨風、(略)〔虫払終日不詳〕	藏經・書籍・記録・	
延宝16年	1686	7・18						十七日、けふより虫払、先藏經、次書籍記録仏像等次第第二虫払之、如例年、	藏經・書籍・記録・	
延宝17年	1687	7・18						十八日、從今日書籍虫払、	藏經・書籍・記録・	
延宝18年	1688	7・18						一、當年從五月雨不晴、雖無大雨、日・微雨也、今日晴天、以外暑氣也、依テ虫払始之、	藏經・書籍・記録・	
延宝19年	1689	7・18						十九日、曇(略)	藏經・書籍・記録・	
延宝20年	1690	7・18						廿一日、從夜中大雨(略)	藏經・書籍・記録・	
延宝21年	1691	7・18						廿二日、晴(略)	藏經・書籍・記録・	
延宝22年	1692	7・18						廿三日、(略)亥刻計大雨雷鳴	藏經・書籍・記録・	
延宝23年	1693	7・18						廿八日、(略)	藏經・書籍・記録・	
延宝24年	1694	7・18						一、むし払今日終ル、	藏經・書籍・記録・	
延宝25年	1695	7・18						廿一日、晴天、從今日書籍記録等虫払、	藏經・書籍・記録・	
延宝26年	1696	7・18						廿二日、(略)晴天	藏經・書籍・記録・	
延宝27年	1697	7・18						廿六日、晴(略)	藏經・書籍・記録・	
延宝28年	1698	7・18						廿七日、微雨、(略)	藏經・書籍・記録・	
延宝29年	1699	7・18						廿九日、むし払すむ、今日たんと記録箱等悉ク藏へ納、及暮白雨、〔9日間〕	藏經・書籍・記録・	
延宝30年	1700	7・18						廿三日、從今日書籍記録等虫払、(略)〔虫払終日不詳〕	藏經・書籍・記録・	
延宝31年	1701	7・18						〔經新築院、八月七日上棟〕	藏經・書籍・記録・	
延宝32年	1702	7・18						八日、栗樹院來、從今日藏經書籍等虫払、	藏經・書籍・記録・	

貞享元年	1684	6	13	8	5	十三日、虫払済、今日入蔵、〔6日間、天気無〕 從今日蔵経并書籍等虫払、 十五日、(略) 一、今日從巳刻計風漸々ニ盛ニ午後二いたり大風也、至晩天止ム、 十六日、快晴 十九日、(略) 一、今日蔵経并書籍等虫払早ヌ、新文庫へ今日蔵経以下聖教書籍納之、件之弥勒像 ヲ安シ号龍華蔵ト名ク、 廿日、記録等虫払及晩亦納龍華蔵、〔12日間〕 廿一日、(略) 今日虫払早、〔4日間、天気無〕 廿二日、從今日蔵経・書籍等虫払、 廿三日、從今日蔵経・書籍・記録等虫払、毘門御出、江戸上洛以後初対面也、諸事江戸 忍之事實談也、 九日、虫払以後及暮行清水寺成就院、登山見河原火、小坂、恵明院・祖岸・法国寺 等也、 十日、虫払、 十一日、虫払、 十二日、虫払、 十三日、虫払、 十四日、虫払、 十五日、虫払、 十六日、虫払今日すむ、〔9日間、天気無〕 十九日、從今日蔵経書籍等虫払、 十九日、今日虫払早、〔8日間、天気無〕 廿七日、從今日虫払、 廿八日、虫払早、〔10日間、天気無〕 廿九日、從今日虫払始之、從四月六日連日雨也、日々雨湿以外也、無三日晴、從今月 二已、入土用といへとも、猶不晴、湿寒又甚也、少々有若綿絮之人前代未聞ノ事也、 去ル十七日夕立雷鳴、其後至今日快晴也、仍テ今日始之也、 廿四日、雷鳴大雨、然とも虫払之以後晩かた也、雷ハ近年之大雷也、(略) 廿五日、申上刻、雨、微雷、 廿九日、今日虫払成就、〔9日間〕 (略) 一、從今日蔵経并書物等虫払、 廿一日、城南院僧正来、虫払故不能対面、(略) 廿二日、未刻計雷少々鳴、白雨大ニ瀟、從先月十九日以後一雨不下、仍テ連日暑氣 以外也、三十年來酷暑也、今日夕立諸人歡喜無極、珍重々々、 廿四、虫払早、〔9日間〕 四日、虫払、〔三日、從先月日々雨或ハ雷鳴、今日始テ晴天、〕 五日、(略) 虫払、從午刻又雷雨、 六日、雨、(略)	蔵経・書籍 巳刻10時
貞享2年	1685	6	20	7	30	聖教 新文庫ハ龍華蔵 蔵経・書籍等	
貞享3年	1686	7	8	8	26	蔵経・書籍・記録 等	
貞享4年	1687	6	19	7	27	蔵経・書籍等	
元禄元年	1688	7	19	7	27		
元禄2年	1689	6	21	8	6	土用 申下刻16時	
元禄3年	1690	6	29	7	21	蔵経・書物等	
元禄4年	1691	7	30	7	28	午刻12時	

元禄8年													元禄9年												
1695													1696												
6・20													6・27												
20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20			
8・3													7・25												
10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	31	30	29	8	7	6	5	4	3	2	1	31	30			
一、むし拂早ヌ、 十三日、晴、 一、御記録蠶拂、 十九日、晴、 一、御掛物蠶拂、 廿日、晴、 一、御装束むし拂、 廿日、晴、 一、御晒書、今日より始ル、 廿一日、晴、 一、むし拂あり、 廿二日、晴、 一、蠶拂あり、 二十三日、晴、申刻雨微雷、 一、蠶はらひあり、 二十四日、晴、 二十五日、晴、 一、むし拂早、 二十六日、晴、 一、御記録蠶拂、 二十七日、晴、未刻雨、 一、御掛物むしはらひ、 二十八日、晴、未ノ刻夕立雷鳴、 一、御装束并太閤装束蠶拂あり々々、 廿九日、晴、 一、御道具等蠶拂、 一、今日より御晒書始ル、依召出入望参集如例、 二十八日、晴、 一、むし拂、 二十九日、快晴、 一、蠶拂あり、 卅日、晴、申刻夕立、 一、むし拂有リ、 一日、晴、 一、むし拂あり、 二日、曇、 三日、曇、 一、蠶拂、	御記録 御掛物 御装束	御晒書 御記録 御掛物 御装束・太閤装束 御道具等	晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴																						

[illegible]

[illegible]

[illegible]

元禄15年										元禄16年									
1702										1703									
7	9	29	26							7	19	18	5	7	4	23	22	21	20
8	3	31								8	11	29	28	17	16	15	14	7	21
一、御晒書有り、今日早ヌ、 廿六日、晴、 一、御記録むし拂あり、 廿九日、晴、未後夕立、雷鳴、 一、御掛物むし拂有り、 九日、快晴、 一、御装束并太閤装束等蟲拂有り、 十九日、快晴、 一、明日より御晒書始り候付、出入ノ輩被仰遣、如例、 二十日、曇、申後快晴、 一、從今日御晒書あり、依召出入ノ輩參集也、 二十一日、快晴、 一、むし拂有り、 二十二日、快晴、 一、蟲拂あり、 二十三日、快晴、 一、むし拂有り、 四日、晴、 一、御記録蟲拂、 五日、快晴、 一、御書籍蟲拂、 十八日、快晴、 一、御かけ物并佛繪像蟲拂、 十九日、快晴、 一、御装束むし拂、 二十一日、快晴、 一、供奉装束むし拂、 廿六日、晴、 一、唐人装束むし拂、 二十七日、晴、 一、幟打敷等蟲拂、 六日、晴、 一、明後八日より御晒書始候付、如例出入之輩被仰遣、昌賢・昌栢・玄因・嶋山・靱負・采女・三立等也、 七日、晴、 八日、晴、 一、今日より御晒書はしまり候付、出入ノ輩參集、 九日、晴、 十日、晴、										書籍カ → 御晒書 御記録 御掛物 御装束・太閤装束 蟲、15時快晴 曇、14時夕立 晴									
←〔虫払11日間〕 御記録 御掛物 御装束・太閤装束 蟲、15時快晴 曇、14時夕立 晴										←〔終日不詳〕 書籍カ 御記録 御書籍 御掛物・仏繪像 御装束 供奉装束 唐人装束 幟打敷等 晴									
晴										晴									

[illegible]

宝永3年		宝永2年	
1706		1705	
6・15		6・8	
21	20	18	17
7・24		7・28	
30	29	27	26
十五日、 一、今日より御書籍蟲拂あり、依召出入ノ輩參集々々、 「十六日、曇或雨」 十七日、晴 一、御晒香あり、 十八日、晴、夕かた雨、即刻止、 「十九日」 廿日、曇、 一、御晒香あり、 廿一日、 一、御晒香有リ、今日早ヌ、		廿四日、快晴、 一、御朱印并水榎等、於小書院坊官中曝之、 六日、快晴 一、明後八日より御晒香はしまり候付、如例出入ノ輩可有伺公之よし 被仰遣也、 七日、 八日、快晴、 一、今日より御書籍むし拂始ル、出入ノ輩參集也、 九日、晴、夕かた雨又晴、 一、御晒香あり 十日、晴、 一、むし拂有リ、 十一日、晴、 十二日、晴、 一、御書籍蟲拂、今日早ヌ、 十三日、晴、 一、御記録むし拂あり、 二十一日、晴、 一、御掛物蟲拂、 二十二日、晴、 一、供奉装束蟲拂、 二十四日、晴、 一、御装束并秀吉公装束等、蟲拂有リ、 二十五日、晴、 一、御道具蟲拂	
御書籍 晒香 御記録 御掛物 供奉装束 御装束・秀吉公装束 御道具		御朱印・水榎（小書院） 坊官中曝之 御晒香 虫払 御書籍	
晴、夕方雨止 曇 曇		快晴 快晴 晴、夕方雨晴 晴	

[illegible]

	正徳 4年	正徳 3年	正徳 2年
	1714	1713	1712
	6・ 15	6・ 2	6・ 23
	13 11 9 6・ 8 5 22 21 8 7・ 5 27 26 23 23		
	7・ 26	7・ 23	7・ 26
	3 8・ 1 30 29 27 26 23		
[十八日、晴、寅刻雷雨]	十五日、晴、 一、御書籍蟲拂、今日より被始也、依召出入ノ輩伺公、 〔十六日、雨〕 〔十七日、晴〕 〔十八日、晴、寅刻雷雨〕	二日、快晴、 一、けふより御書籍蟲拂あり、依召出入ノ輩參集也、 〔三日、快晴〕 〔四日、快晴〕 五日、快晴、 一、御晒書早ス、 六日、快晴、午後白雨雷鳴、暫時シテ止、 一、御記録蟲拂、 八日、晴、 一、御掛物蟲拂、 九日、晴、 一、御装束蟲拂、 十一日、晴、 一、御道具むし拂あり、 十三日、曇或細雨、 一、御屏風蟲拂、	廿三日、曇 一、御屏風むし拂あり、 〔廿四日、晴〕 〔廿五日、晴〕 廿六日、晴 一、御書籍蟲拂早、 廿七日、晴、 一、御記録むし拂あり、 五、晴、 一、御装束蟲拂あり、 八日、晴、 一、御掛物蟲拂有り、 廿一日、晴、 一、御屏風蟲拂、 廿二日、 一、御道具蟲拂有り、
→ 虫私 御書籍	御屏風	御道具	御屏風
← 晒書〔虫私4日間〕	御記録	御記録	← 虫私4日間
御掛物	御装束	御掛物	御装束
御道具	御屏風	御道具	御屏風
曇或細雨	晴	晴	晴
〔晴〕	〔晴〕	〔晴〕	〔晴〕
〔雨〕	〔雨〕	〔雨〕	〔雨〕
〔晴〕	〔晴〕	〔晴〕	〔晴〕

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

享保7年												享保8年											
1723												1723											
6・8												6・19											
30	9	10	11	12	13	15	16	17	1	2	3	4	5	20	21	22	23	24	25				
7・20												7・20											
晦日、晴、 一、佛繪蟲拂、	八日、晴、 一、御手道具類蟲拂之事、	九日、晴、 一、御手道具蟲拂、	十日、晴、未御夕立、雷鳴、 一、御装束并御記録等蟲拂、	十一日、陰、 一、御道具蟲拂、	十二日、晴、 一、御道具蟲拂、	十三日、晴、 一、歌書・和書・佛書蟲拂、	十五日、晴、 一、藏經蟲拂、	十六日、快晴、 一、儒書蟲拂、	十七日、晴、 一、今日御晒書早ヌ	朔、晴、 一、佛繪佛具等蟲拂、	二日、晴、 一、御屏風むし拂、	三日、朝間曇、辰後晴、 一、供奉装束等蟲拂、	四日、快晴、 一、幡之蟲拂、	五日、晴、 一、夜具等蟲拂、	十九日、陰、微雨、 一、今日より御香箱蟲拂始ル、 〔二十日、陰、晚來微雨、〕	廿一日、陰、 一、午刻より御香箱蟲拂、	廿三日、晴、 一、御香箱蟲拂、	廿四日、晴、 一、御香箱蟲拂、					
仏絵	御手道具	御手道具	御装束 御記録等	御道具	御道具	歌書・和書 仏書・虫仏	藏經	儒書	・晒書	仏絵・仏具等	御屏風	供奉装束等	幡	夜具等	虫仏	御香箱	御香箱	御香箱					
晴	晴	晴	晴、13時夕立	陰	晴	晴	晴	快晴	晴	晴	晴	朝曇、7時晴	快晴	晴	陰、微雨	陰、12時より始	晴	晴	晴				
〔終日不詳〕												〔終日不詳〕											

[illegible]

享保11年	1726	6・9	7・8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	8・1	2	3	九日、晴、 南殿ニテ御道具蟲拂、 十日、晴、朝間細雨、																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
享保10年	1725	6・11	7・20	31	12	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	8・1	2	3	十一日、晴、 今日於御座ノ間御納戸御道具類蟲拂、又於南殿佛繪・佛具等蟲拂也、 十二日、晴、 一、供奉裝束等蟲拂、 十一日、晴、 一、今日より御藏經蟲拂始ル、 十二日、快晴、 一、御香籍蟲拂アリ、 十三日、晴、巳刻迄夕曇、 一、御香籍蟲拂、 十四日、晴、 一、今日蟲拂休、 十五日、晴、 一、御香籍蟲拂、 十六日、晴、 一、御記録蟲拂、 十七日、晴、 一、御掛物蟲拂、 十八日、晴、 一、御裝束并太閤裝束等蟲拂、 十九日、晴、未下刻鋭雨、 一、御道具蟲拂、 二十日、晴、 一、佛繪・佛具等蟲拂、 廿一日、晴、 一、御屏風蟲拂、 廿二日、晴、 一、供奉裝束等蟲拂、 廿三日、晴、 一、於御座之間御朱印并秘書蟲拂、 廿四日、晴、 一、於南殿大幡類蟲拂、 廿五日、晴、 一、御納戸御道具蟲拂、																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
御道具（南殿）	御納戸道具	御手道具（御座ノ間）	御朱印・秘書（御座ノ間） 大幡（南殿）	供奉裝束	御屏風	仏絵仏具	御道具	御裝束・太閤裝束	御掛物	御記録	御香籍 ・虫払休	・藏經	・虫払	供奉裝束	御納戸道具（御座ノ間） 仏絵仏具（南殿）	快晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	

[illegible]

近世における史料保存管理の一考察（青木）

享保15年																			1730	6・1	7・1	7・30						
19	18	17	16	15	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	15	26	25								
2	8・1	31	30	29	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	7・1	7・26	7・25								
十九日、陰晴、	一、大幡・中幡むし拂、 十八日、陰晴、	一、供奉装束蠶拂、 十七日、陰晴、	一、佛繪佛具むし拂、 十六日、晴、	一、御座ノ間ニテ御手道具蠶拂、 十五日、晴月蝕三分、 <small>（孝享三刻、東海ノ方ヨリカケハシメ、丑ノ一割、東ノ方ニ至リ、丑ノ四割、西ノ方ニ終ル、）</small>	一、御記録蠶拂、御座ノ間ニテ御秘書蠶はらひあり、 十三日、晴、	一、御記録蠶拂、 十二日、晴、	一、御書籍蠶はらひあり、 十一日、晴、	一、御書籍蠶拂アリ、 十日、晴、	一、御書籍むし拂有り、 九日、晴、	一、御晒書有り、 八日、晴、	六日、晴、未ノ刻計ヨリ陰晴、雷鳴遠ク聞ユ、 七日、晴、	一、御書籍蠶拂、 五日、晴、土用二入、	一、御屏風むし拂、 四日、晴、	一、御装束并太閤唐人装束蠶拂、 三日、晴、	一、御道具蠶拂、 二日、晴、晚來雷雨、戌刻計止、	一、御かけ物蠶拂有り、 一日、晴、日蝕八分、 <small>（午ノ一割、西ノ方ヨリカケハシメ、未ノ四割、申ノ二割、東ノ方ニ終ル、）</small>	御朱印并水帳蠶拂、御座ノ間ニテ、御秘書むし拂あり、 一日、晴、未刻計雷鳴、 一日、晴、未刻計夕立、	晦日、晴、未刻計夕立、 一日、御記録蠶拂、	御記録 朱印・水帳（書院） 秘書（御座ノ間）	御記録 晴、14時雷								
陰晴	陰晴	陰晴	陰晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴、晚雷雨	晴	御掛物	御道具	御装束・太閤唐人装束	御屏風 ・土用入 虫私	御晒書	御書籍	御秘書 （御座ノ間）	御手道具 （御座ノ間）	仏絵仏具	供奉装束	大幡・中幡

享保16年	享保17年	1732	6・19	8・9	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	7・1	2	3
一、茶道方預り道具蟲拂、	(享保16年日次記 散逸のためなし)		十九日、好晴、當番、 一、於南殿御香籍蟲拂始ル、	廿日、晴、午ノ刻計鼓雨、暫シテ晴、 一、御香籍蟲拂アリ、 廿一日、好晴、 一、御香籍蟲拂アリ、 廿二日、快晴、 一、御香籍蟲拂アリ、 廿三日、晴、丑ノ下刻計雨、寅ノ下刻止、 一、御香籍むし拂、 廿四日、晴、 一、御歌香蟲拂、 廿五日、晴、未刻遠雷聞、戌ノ下刻計少鼓雨、雷鳴暫晴レテ止、 一、於御客殿 ^{御書所} 御香籍・御記録涼書アリ、 廿六日、晴、 一、同御記録蟲拂、 廿七日、卯ノ刻雨、暫時ニシテ止ミ晴、酉刻鼓雨、雷五・六聲遠聞ユ、戌半刻計晴、 一、於南殿佛像・佛具等蟲拂アリ、 一、於御書院御秘書涼書アリ、 廿八日、快晴、 一、御掛物蟲拂アリ、 廿九日、晴、 一、於南殿御装束・太閤装束・朝鮮國王装束等蟲拂、 朔日、曇、巳ノ刻ヨリ快晴、未刻鼓雨、雷遠聞ヘテ暫時シテ晴、 一、於南殿御屏風蟲拂アリ、 二日、快晴、殘暑甚、雖然白雲飛氣象爲新秋也、未刻遠鼓雨雷鳴、暫時ニシテ止、雷、 一、同御道具蟲拂、 三日、晴或ハ曇、雷遠ク聞ユ、 一、於御座之間御手道具蟲拂、													
茶道方預り道具	虫私 (南殿)	好晴	晴12時鼓雨後晴	晴215時雨	快晴	好晴	御歌香	御學問所香籍 御記録・涼書	御記録・涼書	6時雨止晴18時鼓雨20時晴	佛像・仏具(南殿) 御秘書(書院) 涼書	御掛物	御裝束(南殿) 太閤装束・朝鮮國王装束 曇9時快晴14時鼓雨後晴	御屏風(南殿)	御道具(南殿)	御手道具(御座ノ間)	

享保18年	1733	6	7
12	13	14	22
26	25	24	5
23	22	21	31
20	19	18	28
17	16	15	26
14	13	12	24
11	10	9	23
8	7	6	22
5	4	3	2
2	1	30	29
1	31	30	28
32	31	30	27
33	32	31	26
34	33	32	25
35	34	33	24
36	35	34	23
37	36	35	22
38	37	36	21
39	38	37	20
40	39	38	19
41	40	39	18
42	41	40	17
43	42	41	16
44	43	42	15
45	44	43	14
46	45	44	13
47	46	45	12
48	47	46	11
49	48	47	10
50	49	48	9
51	50	49	8
52	51	50	7
53	52	51	6
54	53	52	5
55	54	53	4
56	55	54	3
57	56	55	2
58	57	56	1
59	58	57	32
60	59	58	31
61	60	59	30
62	61	60	29
63	62	61	28
64	63	62	27
65	64	63	26
66	65	64	25
67	66	65	24
68	67	66	23
69	68	67	22
70	69	68	21
71	70	69	20
72	71	70	19
73	72	71	18
74	73	72	17
75	74	73	16
76	75	74	15
77	76	75	14
78	77	76	13
79	78	77	12
80	79	78	11
81	80	79	10
82	81	80	9
83	82	81	8
84	83	82	7
85	84	83	6
86	85	84	5
87	86	85	4
88	87	86	3
89	88	87	2
90	89	88	1
91	90	89	32
92	91	90	31
93	92	91	30
94	93	92	29
95	94	93	28
96	95	94	27
97	96	95	26
98	97	96	25
99	98	97	24
100	99	98	23
101	100	99	22
102	101	100	21
103	102	101	20
104	103	102	19
105	104	103	18
106	105	104	17
107	106	105	16
108	107	106	15
109	108	107	14
110	109	108	13
111	110	109	12
112	111	110	11
113	112	111	10
114	113	112	9
115	114	113	8
116	115	114	7
117	116	115	6
118	117	116	5
119	118	117	4
120	119	118	3
121	120	119	2
122	121	120	1
123	122	121	32

享保19年	1734	6・23	27	6	23	6
		24	25	26	27	28
		29	30	31	1	2
		3	4	5	6	7
		8	9	10	11	12
廿七日、快晴、入夜陰、立秋、戌ノ刻ニ入ル、	廿三日、快晴、入夜曇	廿四日、快晴、	二十五日、快晴、燃暑、未半刻計夕立、雷二三聲遠ク聞ユ、入夜快晴、	廿六日、快晴、未刻計大雨、遠雷聞ユ、申半刻ヨリ快晴、	廿七日、快晴、	廿八日、快晴、
一、於御客殿茶道方之蟲拂有リ、	一、御道具蟲拂始ル、	一、御掛物蟲拂、	一、御法衣并太閤装束・唐人装束等蟲拂、	一、佛繪・佛具蟲拂、	一、於御座之間御手道具蟲拂、	一、御屏風等蟲拂、
					一、於御書院御朱印蟲拂、	一、於御座間御記録蟲拂、前々物於御客殿有之候得共、
					子細依有之也、	一、於南殿茶道方蟲拂、
					廿九日、快晴、	一、於御座之間二御記録蟲拂、
					朔日、快晴、	一、御香箱蟲拂、
					二日、陰晴、	一、御香箱蟲拂、
					三日、晴或ハ陰、	一、御香箱蟲拂、
					四日、曇、	一、御香箱蟲拂、
					五日、晴、申刻計ヨリ雨、雷五六聲遠ク聞ユ、雨入于夜不止、	一、御圖書御香箱蟲拂、
					六日、晴或ハ曇、風、	一、御香箱蟲拂、
					一、於御座之間御秘書蟲拂、	八日、快晴、
					一、供奉装束蟲拂、	
・立秋	・虫弘	御掛物	御法衣	仏絵仏具	御手道具(御座ノ間)	御朱印(書院)
茶道方(客殿)	御道具	御掛物	太閤装束・唐人装束	快晴14時のみ大雨16時快晴	御手道具(御座ノ間)	御記録(御座ノ間、前々客殿)
快晴、入夜曇	快晴	快晴14時のみ夕立	快晴14時のみ大雨16時快晴	快晴	快晴	快晴
						御記録(御座ノ間)
						虫弘
						御香箱
						儒書
						御圖書
						御秘書(御座ノ間)
						供奉装束

出典：新暦は、野島寿三郎編「日本暦西暦月日対照表」(日外アソシエーツ刊、一九九〇・三)による。

凡例・注・「」内は、論文執筆者の摘記内容である。

・新暦は、「虫払」等の行事以外には未記入とした。

・文末に頻出する語彙の強調と感歎符として用いられる「々々」とした。

・今日「從」「より」と開始日が明記されている場合、継続して行ったと解釈した。「早」とある場合は、その日を終日とした。開始日、終日が不詳の場合は、「虫払」の記事が現れる初日を「開始日」、最後になる日を「終日」と推定し、その間は継続したかが不明なため、記事記載のある日のみ「虫払」行事を行ったと解した。

[表6] 史料出典一覧

年 代	西 暦	「日記」「日次記」収載文献	出典番号
寛文 3	1663	<p>『妙法院史料』第1巻〔堯恕法親王日記1〕…………… (吉川弘文館刊、昭和51.3) <寛文3～延宝4年></p>	1
4	1664		
5	1665		
6	1666		
7	1667		
8	1668		
9	1669		
10	1670		
11	1671		
12	1672		
延宝 1	1673		
2	1674	<p>『同上』第2館〔同上2〕…………… (同上・昭和52.3) <延宝5～貞享4年></p>	2
3	1675		
4	1676		
5	1677		
6	1678		
7	1679		
8	1680		
天和 1	1681		
2	1682		
3	1683		
貞享 1	1684	<p>『同上』第3巻〔堯恕法親王日記3、堯恕法親王別記他〕… <元禄元～8年> (同上、昭和53.3)</p>	3
2	1685		
3	1686		
4	1687		
元禄 1	1688		
2	1689		
3	1690		
4	1691		
5	1692		
6	1693		
7	1694		
8	1695	<p>『妙法院日次記』第1…………… (統群書類従完成会刊、史料纂集68、昭和59.9) <元禄7～13年></p>	4
9	1696		
10	1697		
11	1698		
12	1699		
13	1700		
14	1701		
15	1702		
16	1703		
宝永 1	1704		
2	1705		
3	1706	<p>『同』第2 (同発行、同74、昭和60.9)…………… <元禄14～宝永4年> (宝永5年欠落)</p>	5
4	1707		
5	1708		
6	1709		
7	1710		
正徳 1	1711		
2	1712		
3	1713		
4	1714		
5	1715		
享保 1	1716		
2	1717	<p>『同』第3 (同発行、同78、昭和61.9)…………… <宝永6～正徳4年></p>	6
3	1718		
4	1719		
5	1720		
6	1721		
7	1722		
8	1723		
9	1724		
10	1725		
11	1726		
12	1727		
13	1728	<p>『同』第4 (同発行、同83、昭和62.9)…………… <正徳5～享保5年></p>	7
14	1729		
15	1730		
16	1731		
17	1732		
18	1733		
19	1734		
20	1735		
元文 1	1736		
2	1737		
		<p>『妙法院史料』第4館〔堯恕法親王日記、真仁法親王日記〕…… (吉川弘文館刊、昭和54.2)</p>	11
		<p>『妙法院史料』第5巻〔古記録・古文書1〕…………… (吉川弘文館刊、昭和55.2)</p>	12
		<p>『妙法院史料』第6巻〔同上2〕 (同上刊、昭和56.2)……………</p>	13